令和五年度　公立学校教員採用候補者選考試験問題

国　語

1／15枚中

注意　答はすべて解答用紙の解答欄に記入すること。句読点は字数に含む。

第一問題　各問に答えよ。

問1　次の漢字に関する問に答えよ。

(1)　次の傍線部の漢字の読みをひらがなで答えよ。

ア　産業は著しい発展を遂げた。

イ　生活が奢侈に流れる。

(2)　次の傍線部で示したカタカナを漢字で記せ。

ア　カンキの声をあげる。

イ　生活がキュウボウする。

問2　次の語句に関する問に答えよ。

(1)　次に示した意味を表す慣用句として最も適当なものを後のA～Eから選び、記号で答えよ。

方法や手段がなくて、何もしないで見ているたとえ

A　手を尽くす　B　歯が立たない　C　頭を痛める　D　手をこまぬく　E　頭を抑える

(2)　四字熟語とその意味の組み合わせとして適当でないものをA～Eから選び、記号で答えよ。

A　一知半解…ちょっと知っている程度で、理解が十分でないこと。

B　明鏡止水…程度や分量が、はかり知れないほど広く大きいこと。

C　一日千秋…待ちこがれる気持ちが非常に強いこと。

D　羊頭狗肉…うわべだけは立派で、実際が伴わないこと。

E　画竜点睛…物事を完成させるため、最後に加える大切な仕上げのこと。

問3　次の漢字の筆順で、破線で囲んだ部分は何画目に書くか、数字で答えよ。

問4　次の古文に関する問に答えよ。

(1)　「更級日記」の作者をA～Eから選び、記号で答えよ。

A　紫式部　B　藤原道綱母　C　清少納言　D　紀貫之　E　菅原孝標女

(2)　次の文法に関する問に答えよ。

ア　次の和歌について、傍線部で示した助動詞の意味として最も適当なものを後のA～Eから選び、記号で答えよ。

瀬をはやみ　岩にせかるる　滝川の　われてもすゑに　あはむとぞ思ふ　崇徳院

A　過去　B　打消　C　推量　D　意志　E　完了

イ　「仰す」は何の動詞の敬語か、A～Eから選び、記号で答えよ。

A　思ふ　B　呼ぶ　C　聞く　D　言ふ　E　着る

(3) 次の和歌で用いられている表現技法として最も適当なものを後のA～Eから選び、記号で答えよ。

足引きの　山鳥の尾の　しだり尾の　長々し夜を　ひとりかも寝む　柿本人麻呂

A 序詞　B 倒置法　C 掛詞　D 本歌取り　E 体言止め

問5 次の漢文に関する問に答えよ。

(1) 次に示す書き下し文に合わせて、返り点をつけよ。

（書き下し文）

学びて時に之を習ふ、亦説ばしからずや。

学而時習之、不亦説乎。

(2) 次の漢文で使われている句法で最も適当なものを後のA～Eから選び、記号で答えよ。

己所不欲、勿施於人。

A 使役　B 禁止　C 受身　D 仮定　E 比較

(3) 次の漢詩について、後の問に答えよ。

春暁　孟浩然

春眠不覚暁
処処聞啼鳥
夜来風雨声
花落知多少

ア 「春暁」の詩の形式として最も適当なものをA～Dから選び、記号で答えよ。

A 五言絶句　B 七言絶句　C 五言律詩　D 七言律詩

イ 「花落知多少」の意味として最も適当なものをA～Eから選び、記号で答えよ。

A 花はどれくらい落ちてしまったのだろうか。
B 花が落ちるのは多かれ少なかれ悲しいことだ。
C 花が落ちるのを見ると、私の心も驚き、落ち着かない。
D 知識を失うことは、花が落ちることと多少似ている。
E 春はどれだけの花が咲き、散っていくのだろう。

第二問　次のⅠ、Ⅱの文章を読み、後の問に答えよ。

Ⅰ

著作権保護の観点により、掲載いたしません。

著作権保護の観点により、掲載いたしません。

Ⅱ

著作権保護の観点により、掲載いたしません。

著作権保護の観点により、掲載いたしません。

問1　次の問に答えよ。

(1)　[①]に入る接続語として最も適当なものをA～Eから選び、記号で答えよ。

A　なぜなら　B　しかし　C　一方で　D　つまり　E　例えば

(2)　次の文が入る箇所として最も適当なものを、文章中の(㋐)～(㋔)から選び、記号で答えよ。

しかし、ある動機が自分の内面のみから生じ、それに即する選択が外的要因の影響なくしてなされることなどあるのだろうか。

(3)　文章[Ⅰ]における、筆者の述べ方の工夫として、最も適当なものをA～Eから選び、記号で答えよ。

A　「自分らしさ」について、事例に共通するキーワードとして「選択」を導き出しながら比喩を効果的に用いて論を展開している。

B　「自分らしさ」について、筆者の見方を示しつつ、「―だろうか」と問いを読み手に投げかけることで、考えを深めることができるように論を展開している。

C　導入部分で筆者の「自分らしさ」に対する独自の考えを述べ、その後、推論を用いつつ、反証を挙げながら論を展開することで、文章に説得力を持たせるようにしている。

D　「自分らしさ」について、これまでの研究結果を示しつつ、さらに「死」についての具体例を挙げながら論を展開することで、文章に説得力を持たせるようにしている。

E　筆者の考えを読み手に分かりやすく伝えるために敬体を用い、筆者の実体験と新聞記事を絡み合わせながら論を展開している。

(4) 傍線部a「うつわ」、傍線部b「余白」の「　」（かぎ）をつけた表記の効果として最も適当なものをA～Eから選び、記号で答えよ。

A　会話文で使用されていることを示している。
B　書物から引用した語であることを示している。
C　未だ定義されておらず、一般化されていない言葉であることを示している。
D　筆者が独自につくり出した新語であることを示している。
E　筆者が語に特定のニュアンスを込めていることを示している。

問2　次の【資料】を読み、後の問に答えよ。

【資料】

Ⅰ・Ⅱを読んだ生徒の会話

ゆうり　Ⅰの文章は「自分らしさ」について書かれているね。

あおい　Ⅱの文章の話題は「利他」。ケア、ケアリングについて、学者の考えを引用しながら書かれているよ。

ゆうり　Ⅰは、前半で新聞や雑誌の記事を取り上げ、具体例を示しながら①「自分らしさ」に必要な要素を定義づけているね。

あおい　そう考えると、Ⅱの具体例はそこまで詳しくはないかな。その点、Ⅰの後半で示される②パラドックスの事例には納得させられたよ。

ゆうり　そうだね。そのパラドックスを踏まえて二つの文章を読むと、③「自分らしさ」と「利他」の関係性についても考えることができるから面白いね。

(1) 波線部①「『自分らしさ』に必要な要素」について、二十字～二十五字で説明せよ。

(2) 波線部②「パラドックス」とはどういうことか。それを具体的に説明した箇所を「～こと。」に続くようにⅠの文章より四十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えよ。

(3) 波線部③「『自分らしさ』と『利他』の関係性」について、筆者の論をふまえて、八十字～百字で説明せよ。

国語

7／15枚中

第三問題　摂政藤原基経に仕える五位は、民部卿時長の子である藤原利仁に芋粥を飽くまで馳走してやると誘われ、利仁の敦賀の館へ京から出向いている。次のⅠ、Ⅱの文章を読み、後の問に答えよ。

Ⅰ

その日の夜のことである。①五位は、利仁のやかたの一間に、切灯台の灯をながめるともなく、ながめながら、寝つかれない長の夜をまじまじして、明かしていた。すると、夕方、ここへ着くまでに、利仁や利仁の従者と、談笑しながら、越えて来た松山、小川、枯野、あるいは、草、木の葉、石、野火の煙のにおい、――そういうものが、一つずつ、五位の心に、浮んできた。ことに、雀色時の霧の中を、やっと、このやかたへたどりついて、長榻に起してある、炭火の赤いほのおを見た時の、ほっとした心もち、――それも、今こうして、寝ていると、遠い昔にあったこととしか、思われない。五位は綿の四、五寸もはいった、黄いろい直垂の下に、楽々と、足をのばしながら、ぼんやり、われとわが寝姿を見まわした。

直垂の下に利仁が貸してくれた、練色の衣の綿厚なのを、二枚まで重ねて、着こんでいる。それだけでも、どうかすると、汗が出かねないほど、暖かい。そこへ、夕飯の時に一杯やった、酒の酔いが手伝っている。まくらもとの部一つ隔てた向こうは、霜のさえた広庭だが、それも、こう陶然としていれば、少しも苦にならない。万事が、京都の自分の曹司にいた時と比べれば、雲泥の相違である。が、それにもかかわらず、我が五位の心には、なんとなくつりあいのとれない不安があった。第一、時間のたっていくのが、待遠い。しかもそれと同時に、夜の明けるということが、――芋粥を食う時になるということが、②そう早く、来てはならないような心もちがする。そうしてまた、この矛盾した二つの感情が、互いに剋し合う後ろには、境遇の急激な変化から来る、落着かない気分が、今日の天気のように、うすら寒く控えている。それが、皆、じゃまになって、せっかくの暖かさも、容易に、眠りを誘いそうもない。

すると、外の広庭で、誰か大きな声を出しているのが、耳にはいった。声がらでは、どうも、今日、途中まで迎えに出た、白髪の郎等が何か告れているらしい。そのひからびた声が、霜に響くせいか、凛々として凩のように、一語ずつ五位の骨に、こたえるような気さえする。

「このあたりの下人、承われ。殿の御意あそばさるるには、明朝、卯時までに、切口三寸、長さ五尺の山の芋を、老若各、一筋ずつ、持って参るようにとある。忘れまいぞ、卯時までにじゃ」

それが、二、三度、くり返されたかと思うと、やがて、人のけはいがやんで、あたりはたちまちもとのように、静かな冬の夜になった。その静かな中に、切灯台の油が鳴る。赤い真綿のような火が、ゆらゆらする。五位はあくびを一つ、かみつぶして、また、とりとめのない、思量にふけりだした。――山の芋というからには、もちろん芋粥にする気で、持って来させるのに相違ない。そう思うと、一時、外に注意を集中したおかげで忘れていた、さっきの不安が、いつの間にか、心に帰って来る。ことに、前よりも、いっそう強くなったのは、あまり早く芋粥にありつきたくないという心もちで、それがいじわるく、思量の中心を離れない。どうもこう容易に「芋粥に飽かん」ことが、事実となって現れては、せっかく今まで、何年となく、しんぼうして待っていたのが、いかにも、むだなほねおりのように、みえてしまう。できることなら、何か突然故障が起っていったん、芋粥が飲めなくなってから、また、その故障がなくなって、今度は、やっとこれにありつけるというような、そんな手続きに、万事を運ばせたい。――こんな考えが、*1「こまつぶり」のように、ぐるぐる一つ所をまわっているうちに、いつか、五位は、旅の疲れで、ぐっすり、熟睡してしまった。

あくる朝、眼がさめると、すぐに、昨夜の山の芋の一件が、気になるので、五位は、何よりも先に部屋の蔀をあげてみた。すると、知らないうちに、寝すごして、もう卯時をすぎていたのであろう。広庭へ敷いた、四、五枚の長筵の上には、丸太のような物が、およそ、二、三千本、斜につき出した、檜皮葺の軒先へつかえるほど、山のように、積んである。見るとそれが、ことごとく、切口三寸、長さ五尺の途方もなく大きい、山の芋であった。

五位は、寝起きの眼をこすりながら、ほとんど*2周章に近い驚愕に襲われて、呆然と、周囲を見まわした。広庭の所々には、新しく打ったらしい杭の上に五斛納釜を五つ六つ、かけ連ねて、白い布の襖を着た若い下司女が、何十人となく、そのまわりに動いている。火をたきつけるもの、灰をかくもの、あるいは、新しい白木のおけに、*3「あまずらみせん」をくんで釜の中へ入れるもの、皆芋粥をつくる準備で、眼のまわるほど忙しい。釜の下から上る煙と、釜の中からわく湯げとが、

まだ消え残っている明け方の霧と一つになって、広庭一面、はっきり物も見定められないほど、灰色のものがこめた中で、赤いのは、烈々と燃え上がる釜の下のほのおばかり、眼に見るもの、耳に聞くものことごとく、戦場か火事場へでも行ったような騒ぎである。五位は、いまさらのように、この巨大な山の芋が、この巨大な五斛納釜の中で、芋粥になる事を考えた。そうして、自分が、その芋粥を食うために京都から、わざわざ、越前の敦賀まで旅をして来たことを考えた。考えれば考えるほど、何一つ、情なくならないものはない。我が五位の同情すべき食欲は、実に、この時もう、一半を減却してしまったのである。

それから、一時間ののち、五位は利仁や舅の有仁とともに、朝飯の膳に向かった。前にあるのは、銀の提の一斗ばかりはいるのに、なみなみと海のごとくたたえた、③恐るべき芋粥である。五位はさっき、あの軒まで積上げた山の芋を、何十人かの若い男が、薄刃を器用に動かしながら、片端からけずるように、勢いよく切るのを見た。それからそれを、あの下司女たちが、右往左往に馳せちがって、一つのこらず、五斛納釜へすくっては入れ、すくっては入れするのを見た。最後に、その山の芋が、一つも長筵の上に見えなくなった時に、芋のにおいと、甘葛のにおいとを含んだ、幾道かの湯げの柱が、蓬々然として、釜の中から、晴れた朝の空へ、舞上って行くのを見た。これを、まのあたりに見た彼が、今、提に入れた芋粥に対した時、まだ、口をつけないうちから、すでに、満腹を感じたのは、おそらく、無理もない次第であろう。――五位は、提を前にして、間の悪そうに、額の汗をふいた。

「芋粥に飽かれたことが、ござらぬげな。どうぞ、遠慮なく召上がってくだされ。」

舅の有仁は、童児たちに言いつけて、さらに幾つかの銀の提を膳の上に並べさせた。中にはどれも芋粥が、あふれんばかりにはいっている。五位は眼をつぶって、ただでさえ赤い鼻を、いっそう赤くしながら、提に半分ばかりの芋粥を大きな土器にすくって、いやいやながら飲み干した。

「父も、そう申すじゃて。平に、遠慮はご無用じゃ」

利仁もそばから、新たな提をすすめて、いじわるく笑いながらこんなことを言う。弱ったのは五位である。遠慮のないところを言えば、始めから芋粥は、一椀も吸いたくない。それを今、我慢して、やっと、提に半分だけ平らげた。これ以上、飲めば、喉を越さないうちにもどしてしまう。そうかといって、飲まなければ、利仁や有仁の厚意を無にするのも、同じである。そこで、彼はまた眼をつぶって、残りの半分を三分の一ほど飲み干した。もうあとは一口も吸いようがない。

「なんとも、かたじけのうござった。もう十分ちょうだいいたしたて。――いやはや、なんともかたじけのうござった。」

五位は、しどろもどろになって、こう言った。よほど弱ったとみえて、口髭にも、鼻の先にも、冬とは思われないほど、汗が玉になって、たれている。

「これはまた、ご少食なことじゃ。客人は、遠慮をされるとみえたぞ。それそれその方ども、何をいたしておる」

童児たちは、有仁の語につれて、新たな提の中から、芋粥を、土器にくもうとする。五位は、両手を蠅でもおうように動かして、平に、辞退の意を示した。

「いや、もう、十分でござる。……失礼ながら、十分でござる」

もし、この時、利仁が、突然、向こうの家の軒を指さして、「あれをご覧じろ」と言わなかったなら、有仁はなお、五位に、芋粥をすすめて、やまなかったかもしれない。が、幸いにして、利仁の声は、一同の注意を、その軒の方へ持って行った。檜皮葺の軒には、ちょうど、朝日がさしている。そうして、そのまばゆい光に、光沢のいい毛皮を洗わせながら、一疋の獣が、おとなしく、すわっている。見るとそれは一昨日、利仁が枯野の路で手どりにした、あの阪本の野狐であった。

「狐も、芋粥がほしさに、見参したそうな。男ども、しゃつにも、物を食わせてつかわせ」

利仁の命令は、言下に行われた。軒からとびおりた狐は、ただちに広庭で芋粥の馳走に、あずかったのである。

五位は、芋粥を飲んでいる狐をながめながら、ここへ来ない前の彼自身を、なつかしく、心の中でふり返った。それは、多くの侍たちに愚弄されている彼である。京童にさえ「なんじゃ。この赤鼻めが」と、ののしられている彼である。色のさめた水干に、指貫をつけて、飼主のないむく犬のように、朱雀大路をうろついて歩く、あわれむべき、孤独な彼である。しかし、同時にまた、芋粥に飽きたいという欲望を、ただ一人大事に守っていた、幸福な彼である。――彼は、この上芋粥

を飲まずにすむという安心とともに、満面の汗がしだいに、鼻の先から、かわいてゆくのを感じた。晴れてはいても、敦賀の朝は、身にしみるように、風が寒い。五位はあわてて、鼻をおさえると同時に銀の提に向かって④大きなくさめをした。

（芥川龍之介『芋粥』より）

（注）＊1　こまつぶり……こま。回して遊ぶ玩具のこと。
＊2　周章……あわてふためくこと。
＊3　あまずらみせん……甘葛（ツル草）を煎じた汁。甘味料として使用。
＊4　提……酒や水を注ぐのに用いる口付きの器。
＊5　一斗……約十八リットル。

Ⅱ

「何ぞの湯涌すぞ」と見れば、この水と見しは、＊1味煎なりけり。また若き男ども十余人ばかり出で来て、袂より手を出して、薄き刀の長やかなるをもつて、この暑預を削りつつ、擽切に切る。早ふ暑預粥を煮るなりけり。見るに、食ふべき心地せず、返りては疎ましく成りぬ。さら〳〵と＊2煮返して、「暑預粥出で来にたり」と云へば、「参らせよ」とて、大きなる土器して、銀の提の斗納ばかりなる三つ四つばかりに汲み入れて持て来たりたるに、一盛だにえ食はで、「飽きにたり」と云へば、いみじく咲ひて集まり居て、「客人の御得に、暑預粥食ふ」など云ひ嘲り合へり。しかる間、向かひなる屋の軒に狐さしのぞき居たるを、利仁見つけて、「御覧ぜよ、昨日の狐の見参するを」とて、「彼に物食はせよ」と云へば、食はするを、うち食ひて去にけり。

かくて、五位一月ばかりあるに、よろづ楽しきこと限りなし。さて上りけるに、＊3仮納の装束あまた下り調へて渡しけり。また、綾、絹、綿など皮子＊4あまたに入れて取らせたりけり。（中略）またよき馬に鞍置きて、物など加へて取らせければ、皆得富みて上りにけり。

まことに、＊5所に付きて年ごろになりて赦されたる者はかかることなむ、おのづから有りける、となむ語り伝へたるとや。

（『今昔物語集』より）

（注）＊1　味煎……甘葛を煎じた汁。甘味料として使用。
＊2　煮返して……煮えたぎらせて。
＊3　仮納の装束……普段着や晴れ着。
＊4　皮子……衣服などを入れるかご。
＊5　所に付きて～赦されたる者……長年勤め上げ、人々から認められている者。

問1　傍線部①「五位は、～明かしていた」とあるが、この時の五位の心情を端的に説明した表現を十一字で抜き出せ。

問2　傍線部②「そう早く、来てはならないような心もち」とあるが、五位がこのような心もちになるのはなぜか。その理由を説明した次の文の空欄に、適当な表現を二十字～三十字で入れよ。

あまりに早くその時が来てしまうと、［　　］に思えてくるから。

問3　傍線部③「恐るべき芋粥」とあるが、五位がそのように感じたのはなぜか。その理由として最も適当なものをA～Eから選び、記号で答えよ。

A　芋粥を飽くほど食べてみたいという願いが今まさに叶うのだと思うと、その非現実的な状況が疑わしく思えてきたから。

B　芋粥を作る様子のがさつさに腹立たしさを感じ、もはや一口も食べたくないと思うほど芋粥に嫌悪感を抱いているから。

C　芋粥を飽くほど食べたいという願いをいとも簡単に叶えることのできる利仁の強大な権力を突きつけられ、怖くなってきたから。

D　芋粥を飽くほど食べるという幸福を手にしたがゆえに、この後どんな不幸が待ち受けているのか急に不安になってきたから。

E　芋粥を食べるため敦賀まで来てしまった自分を情けなく思っていたところに大量の芋粥が差し出され、怯んでしまったから。

問4　傍線部④「大きなくさめをした」とあるが、このことから読み取れる事柄として最も適当なものをA～Eから選び、記号で答えよ。

A　芋粥をもう食べなくてもよいという安心感が生じたことで、五位の元来の粗野な性格があらわになったことが読み取れる。

B　芋粥を食べなければならないという追いつめられた状況から解放されたことにより、五位が体の感覚を取り戻したことが読み取れる。

C　敦賀は満面の汗が引くほど寒く、風邪を引いたにもかかわらず、そのことさえも気付かないほど五位が緊張していたことが読み取れる。

D　五位は芋粥に向かってくさめをすることによって、芋粥を拒絶する気持ちを暗に周囲に示そうとしたことが読み取れる。

E　五位は芋粥をこれ以上食べずにすむという安心感を抱いたものの、周囲の不穏な空気を感じて、身構えていることが読み取れる。

問5　Ⅰを生徒に黙読させた後、意見交流を行わせた。Ⅰの読解として適当なものをA～Fから二つ選び、記号で答えよ。

A　文章の書き方についてだけれど、文章に読点が多いのが特徴的ね。区切ることでテンポ良く読み進めていくことができるから、読者はより作品の中に入り込むことができるわ。

B　この文章は回想を多用したり、登場人物それぞれの視点で重層的に話を展開したりと、構成もとても特徴的だと思うな。

C　表現といえば、僕は比喩表現が面白いなと思ったよ。例えば、「赤い真綿のような火」は、小さい柔らかな火の様子が見事に表現されているよ。

D　白髪の郎等の甲高い声を「凜々として凩のよう」と表現しているところや、あれこれ考えて揺らいでいる様子をこまが回る様子に例えているのも面白いよね。

E　五位が周囲に馬鹿にされ、同情を寄せる人もいなかったことが、「飼主のないむく犬のよう」という表現から想像がつくね。

F　五位が敦賀に来なければよかったと後悔する様子を、「ぼんやり、われとわが寝姿を見まわした」、「狐をながめながら、ここへ来ない前の彼自身を、なつかしく、心の中でふり返った」と、彼の視線の先にあるもので印象的に示しているのも、巧みな表現だよ。

問6　Ⅰ はⅡを基として作られた小説である。ⅠとⅡとを比較しつつ、Ⅰが描こうとした主題について九十字～百字で述べよ。

第四問題　学習指導要領について、後の問に答えよ。

○ 問1、問2は、次に指示するとおり、どちらかを選択して解答すること。
・中学校受験者は、Ⅰ〔中学校学習指導要領に関する問題〕を解答すること。
・高等学校受験者は、Ⅱ〔高等学校学習指導要領に関する問題〕を解答すること。
・特別支援学校受験者は、Ⅰ〔中学校学習指導要領に関する問題〕またはⅡ〔高等学校学習指導要領に関する問題〕のいずれかを選択して解答すること。選択した区分について、解答用紙所定の欄に○で囲んで示すこと。
○ 問3は全員解答すること。

Ⅰ〔中学校学習指導要領に関する問題〕

問1　次の文章は中学校学習指導要領（平成二十九年告示）「第2章　各教科　第1節　国語」の「第3　指導計画の作成と内容の取扱い」の一部である。［ア］～［ウ］にあてはまる語句を後のA～Lから選び、記号で答えよ。

(2)　教材は、次のような観点に配慮して取り上げること。
ア　国語に対する認識を深め、国語を尊重する態度を育てるのに役立つこと。
イ　［ア］、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにするのに役立つこと。
ウ　公正かつ適切に判断する能力や創造的精神を養うのに役立つこと。
エ　科学的、論理的に物事を捉え考察し、視野を広げるのに役立つこと。
オ　人生について考えを深め、［イ］を養い、たくましく生きる意志を育てるのに役立つこと。
カ　人間、社会、自然などについての考えを深めるのに役立つこと。
キ　我が国の［ウ］に対する関心や理解を深め、それらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。
ク　広い視野から国際理解を深め、日本人としての自覚をもち、国際協調の精神を養うのに役立つこと。

A　主体性　B　客観的　C　豊かな人間性　D　伝え合う力　E　協調性
F　伝統と文化　G　伝統と歴史　H　言語文化　I　文学的　J　論理的
K　言語活動　L　抽象的

問2　次の表は、中学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説「第2章　国語科の目標及び内容」の「第1節　国語科の目標」に示されたものである。［エ］、［オ］にあてはまる語句を後のA～Lから選び、記号で答えよ。

	第1学年	第2学年	第3学年
知識及び技能	(1) 社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の［エ］に親しんだり理解したりすることができるようにする。	(1) 社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の［エ］に親しんだり理解したりすることができるようにする。	(1) 社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の［エ］に親しんだり理解したりすることができるようにする。
思考力、判断力、表現力等	(2) 筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを確かなものにすることができるようにする。	(2) ［オ］に考える力や共感したり想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。	(2) ［オ］に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
学びに向かう力、人間性等	(3) 言葉がもつ価値に気付くとともに、進んで読書をし、我が国の［エ］を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。	(3) 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の［エ］を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。	(3) 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を通して自己を向上させ、我が国の［エ］に関わり、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。

A　主体的　　B　客観的　　C　豊かな人間性　　D　伝え合う力　　E　協調性
F　伝統と文化　　G　伝統と歴史　　H　言語文化　　I　文学的　　J　論理的
K　言語活動　　L　抽象的

Ⅱ〔高等学校学習指導要領に関する問題〕

問1　次の文章は高等学校学習指導要領（平成三十年告示）「第2章　第1節　国語」の「第2款　各教科」、「第6　古典探究　1目標」の一部である。［ア］、［イ］にあてはまる語句を後のA～Hから選び、記号で答えよ。

(1)　生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の伝統的な［ア］に対する理解を深めることができるようにする。

(2)　論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、古典などを通した先人のものの見方、感じ方、考え方との関わりの中で［イ］を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

(3)　言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させ、我が国の［ア］の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

A　主体性　　B　豊かな人間性　　C　伝え合う力　　D　協調性　　E　文学
F　伝統と文化　　G　言語活動　　H　言語文化

問2　次の表は、高等学校学習指導要領（平成三十年告示）解説「第1章　総説」の「第4節　国語科の内容」においてまとめられた、「【B　書くこと】領域の構成」の中の言語活動例である。［ウ］～［オ］にあてはまるものを後のA～Gから選び、記号で答えよ。

言語活動例				
現代の国語	言語文化	論理国語	文学国語	国語表現
（ウ） （エ）	（オ）	（ウ） （エ）	（オ）	（ウ） （エ）

A　文学的な文章を書く活動
B　情報を活用して書く活動
C　感受性豊かな文章を書く活動
D　客観的な文章や構造的な文章を書く活動
E　論理的な文章や実用的な文章を書く活動
F　的確に表やグラフを分析した文章を書く活動
G　適切に表やグラフを説明した文章を書く活動

問3　「話すこと・聞くこと」の指導のために「説得力のあるスピーチを行おう」という単元を設定し、「環境問題について考え、その解決策について自身の考えを同級生に発信しよう」というテーマで、個人でスピーチを行うことにした。後の問に答えよ。

〔本単元の重点指導事項〕

中学校第3学年…

(1)　ア　目的や場面に応じて、社会生活の中から話題を決め、多様な考えを想定しながら材料を整理し、伝え合う内容を検討すること。

イ　自分の立場や考えを明確にし、相手を説得できるように論理の展開などを考えて、話の構成を工夫すること。

高等学校第1学年…

「現代の国語」

(1)　ア　目的や場に応じて、実社会の中から適切な話題を決め、様々な観点から情報を収集、整理して、伝え合う内容を検討すること。

イ　自分の考えが的確に伝わるよう、自分の立場や考えを明確にするとともに、相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、話の構成や展開を工夫すること。

〔学習の流れ〕

①　身近にある環境問題を出し合い、グループで取り上げる環境問題を決める。

②　その環境問題について分担して調べ、グループ内で共有する。

③　共有された情報をもとに、各自がスピーチ原稿を作成する。

④　各自が他のグループに対して、スピーチを行う。

〔スピーチ原稿〕　※〔学習の流れ〕③で、ある生徒が作成したもの。

この間テレビで、世界の海のプラスチックごみについて報道していました。そのテレビでは、プラスチックごみを飲み込んでしまったり、体に巻き付いてしまったりしている動物を紹介していました。また、人間が食べる魚の体内にもプラスチックが溜まっているそうです。プラスチックごみは今、深刻な環境問題になっています。

私は海が好きで、家族とよく行きます。思い起こしてみると、私が行く海にもプラスチックごみが沢山落ちています。友達がネットで調べたことによると、こうしたごみの3分の2は、発泡スチロールやペットボトルが漂着したものだそうです。プラスチックが海を汚染し、動物を傷つけていることは問題であり、早急に解決していかなければならない問題だと思います。今後、私が海に行ったときは、ごみ拾いを率先して行いたいです。

(1)　〔学習の流れ〕②において、「グループ内で共有する」ときにはどのようなことに留意させるべきか記せ。

(2)　スピーチを評価する際に重要なこととしてあてはまらないものをA～Eから選び、記号で答えよ。

A　論理的な展開となっている。

B　主張したい意見が明確である。

C　適切な題材が提示されている。

D　スピーチにふさわしい言葉遣いをしている。

E　聞き手を意識し、積極的に身振りを用いている。

(3) この〔スピーチ原稿〕を書いた生徒に次の【資料】を提示し、指導を行いたい。この〔スピーチ原稿〕の課題を指摘し、【資料】を用いてどのような助言ができるか具体的に記せ。

【資料】

レジ袋チャレンジとは

レジ袋有料化をきっかけに、プラスチックごみ問題について考えて頂き、日々の買い物でマイバッグを持参して、“レジ袋はいりません”、“レジ袋は結構です”と辞退することが当たり前になる、そういった一人一人のライフスタイルの変革を目指す環境省のキャンペーンです。